

近松座初舞台〈摘録〉

〈出典：「浪花浄瑠璃雑誌」第100号、明治45年1月〉

遠大の抱負と高尚なる理想を以て組織せられたる近松座株式会社が地を佐野屋橋南詰に相し劇場の建築に着手したるは昨四十四年一月なりし、此の工事は神戸建築工務所なる設楽工学士の設計にて同所技師宮崎加平氏実務に当り漸く旧臘竣成を告げ、十二月廿七日其の筋の検査済となり、同二十八日使用の許可を得、翌廿九日には設計の大略及び装飾并に設備の要点を説明し且つ批評を乞う趣きを以て弊社も招待されたるが、宮崎技師場所限なく懇切に案内され諄々と説明せし所を記せんに、敷地の総坪数三百五十六坪、建坪百九十八坪にして煉瓦造二階建、屋根はル子エーツサン式、蕪然として鰻谷の天空に聳ゆるもの是れ即ち文豪近松翁の姓を冠する近松座の外観なり、此の地所を購うに三万円の価を払い、建築費の総額は実に十七万円と称せらる、内部は総て檜造り純日本式にて優に七百三十余の聴客を容るべし、舞台の間口は六間にして奥行五間、文楽座よりも広きこと各半間宛なり、その正面には化粧檯のしつらえあるも嬉しく、二階棧敷の東北に方りて華美を極むるは貴賓室にて、太夫部屋は舞台の上であり、電燈は桜色の二千燭光一、五色を彩れるもの及び釣鐘型大小三十余个、之を点すれば燦然として目を奪う、棧敷廻りは黒塗に金色眩き金具に飾られたる高欄、大天井には空気抜の設けあり、合せ天井は黒塗の呂縁にて桐柱の一枚張り、平場は二間毎に幅一尺の通いを設けて出入の便を利かし、化粧室、売店、裏の階段室等は西洋式にて清潔を極め、案内所、携帯品預所等設備万端行届き、殊に地下室なる便所二つ、天井はアンテーエ、手洗水は下向きの栓を押せば独り噴出して奇麗なり、本家茶屋は外部西南角にありて洋式を採り、お茶子を廃して黒紋付の真面目な女給仕とし、座蒲団、茶器一切悉く翁の定紋あり、両棧敷には網棚を吊して手軽き携帯品を置くべく、開場は毎日午後正一時を遅れず閉場は十時を出でざる杯も聴客の業務と衛生を慮りたる跡を見るべし、注意何処迄も周到に、設備飽迄も懇切なるは当座の特色にして既にその第一歩に於て従来他に行われつつある弊風を追い去り、新工夫を施したる所、理想と抱負の実蹟にして今後両三年を過ぎば斯界の改善、斯道の開発頗る見るべきの功績現わるべきを疑わず、加之取締役は孰れも新智識に富める市内歴々の紳士なるが上に演芸部長には経験ある旧堀江座主木津谷吉兵衛氏を据えたり大勘定には有名なる旧彦六座主柳適太夫を東京より迎えて背景及び道具立は堪能なる長谷川の意匠によりて蕪新に趣向せられ、人形は故吉田冠四の秘蔵せる陸奥大椽より伝わりしもの九十余種、衣裳は全部切り裁て三越呉服店にて調整せられ、緞帳は菅栢彦画伯の筆に成れる浄瑠璃七功神を図せらる、其の外諸方より寄贈せし主なる幕は島之内、うつぼ、堂島浜、東京レザー関西代理店の四張を春子太夫へ、神戸中検芸妓総連中より吉田兵吉へ、堂島浜、大阪土木建築組合の二張は伊達太夫へ、此他各連より長子太夫、八助、竹三郎等へ孰れも縮緬又は緞子の瀟洒なるもの、優料なるもの実に眼も覚むる計りなり、又演物は当座の名に因み毎回近松ものを一つ採択する方針なるが今回は初舞台なればとて翁一代の傑作国性爺合戦、次で野崎村

を撰びたり、進歩主義を標榜せる同座にして干支など旧弊を云為したるにはあらざるべく、先代萩の鼠は偶然なるべし、勅題に因みて鶴千代、千松は随分と凝りたるもの、本誌は前号に於て予想を記載し置きたるが、悉く的中したるは手柄ならずや、斯くて九日の試演を終り十一、二の両日には府市会議員、紳士淑女、重なる客筋を招待して開場式を挙げ、続いて十三日より一般の観客を迎えたるが、幾百旒の幟、積樽、積俵、大アーチ、界限一帯の吊提灯は時ならぬ花と迷いて賑わしく鰻谷の寂寞を破る櫓太鼓の音も冴え、事務員の奔走、取締役の恵比寿顔

(中略)

前狂言 国性爺合戦

楼門の段 竹本 菅 太 夫

毎日かわり 竹本 角 太 夫

清国革命の動乱に意味あり気な此の出し物は時節柄人気に投じたり、此場は菅、角の毎日替り、角は聴かざりしが衆評は互角との事なり、併し此楼門は斯界で喧しい場で随分味く語れば切を喰うので有るが、後は知らず、評者の聞きし時は喰う所か錦祥女杯は物にならぬ様感じたり「なふ其詞がはや証抛肌身はなさぬ姿絵を高欄に押開き柄付の鏡取出し月にうつろふ父の顔云云」に「あくれば朝日を父ぞと拝み暮れば世界の図を開き」杯の所は錦祥女の嬋妍を写出し、やんやと聴衆を狂せしめる様語って欲しと思う。

獅子ケ城の段 切 竹 本 春子太夫

此所人形出遣い 糸 豊澤新左衛門

此の場は実に難中の至難場にて故長門太夫以来之を語りこなしたるものなし、強て鑿索すれば降て呂太夫位なるべし、然るを春子が之に当りたる勇氣は嘉みすべく流石に苦心の程も見ゆ、甘輝も大きく威厳備わりて動き、錦祥女の節義に死せんとするを、和藤内の母が継母の故を以て甘輝を遮り錦祥女を庇うて「コレ恐い事はない、母にシツカと取つきやと」など情趣溢れてホロリとせざるを得ず、左れば甘輝に全幅の力を注ぎたる傍ら更に偉大なる和藤内を活躍せしめんとする苦心は察するに余りあるも、甘輝を圧すべき大人物は遺憾ながら春子に望むの無理たるを免れず、当代の太夫としては先ず大隅なるべきか、左は云え甘輝以下の人形は見事にて批難すべき点を見ず、斯る大舞台を車輪に語りたる春子の技量は認め得たるも、此の紛乱錯綜せる大脚色が聴客の脳裡に如何なる感動を与えしか果して春子の苦心を聞き得しや否やを疑う。之は春子に対し気の毒に堪えず、而も聞人の罪にて春子としては成効と云うより語なし、新左衛門の糸は評者の耳に善悪無差別と感じたり、此の場の道具建て金殿玉楼、庭園、衣裳に至る迄悉く支那式に模倣されて成程獅子ケ城を偲ばせたる手際は有繫に聴衆の眼を惹きたり、只だ一の注文したきは錦祥女が紅を流すべき水流の設け之れなり、引道具など繁雑にして困難の業には相違なかるべきも、此の設備なかりしは確かに欠点と云うを憚らず。

(後略)